

第 65 回 日本卵子学会学術集会

セッション：一般演題（口頭）

日程：20240518\_20240519

演題番号：O-25

発表形式：口頭発表

会場の都市名：神戸コンベンションセンター

新鮮胚と凍結融解胚に対する PGT-A 生検の臨床成績に与える影響

小林 亮太<sup>1)</sup> 三村 結香<sup>1)</sup> 大垣 彩<sup>1)</sup> 水野 里志<sup>1)</sup> 岡村 直哉<sup>1)</sup> 上田 匡<sup>1)</sup> 重田 護<sup>1)</sup>  
辻 勲<sup>1)</sup> 福田 愛作<sup>1)</sup> 森本 義晴<sup>2)</sup>

【目的】PGT-A における胚生検には新鮮胚生検と凍結融解胚生検がある。本研究は、PGT-A の新鮮胚生検と凍結融解胚生検の臨床成績に与える影響を検討した。

【方法】2020 年 1 月から 2023 年 9 月までに反復着床不全を適応とする PGT-A を 205 症例 395 周期に実施した。得られた胚盤胞 1114 個を対象とし、新鮮胚生検を施行した胚(F 群)と凍結融解胚生検を施行した胚(C 群)に分け、PGT-A 臨床成績を後方視的に検討した。検討 1：胚の生検から凍結完了までの、生検後変性率、凍結完了率を両群間で比較した。検討 2：凍結融解胚移植周期での、融解後胚変性率、臨床的妊娠率、流産率を両群間で比較した。各検討は、採卵時患者年齢、良好胚盤胞(Gardner 分類 3BB 以上)、胚齢を調整因子とする多変量解析を行った。

【結果】検討 1：C 群の生検前の融解後変性率は 0.4%(2/520)。融解後に生検可能な拡張期胚盤胞に至らなかった胚は 6.2%(32/520)であった。F 群と C 群の生検後変性率はそれぞれ 2.2%(13/594) vs 1.0%(5/486)、凍結完了率は 97.8%(581/594) vs 92.5%(481/520)であった。多変量解析の結果、生検後変性率は両群間に差がなかったが、C 群の凍結完了率は有意に低かった (OR:5.5、95%CI:2.71-11.0、 $p<0.001$ )。検討 2：F 群と C 群の融解後変性率：0.9%(1/117) vs 2.0%(3/148)、臨床的妊娠率：48.3%(56/116) vs 44.1%(64/145)、流産率は：10.7%(6/56) vs 17.2%(11/64)であり両群間で有意差がなかった。

【結論】PGT-A 実施後の胚移植における臨床成績は、新鮮胚生検と凍結融解胚生検で差はなかったが、凍結融解胚生検は生検前の融解後変性と生検可能拡張期胚盤胞に至らない胚の存在より、生検後凍結完了率が低下した。そのため、PGT-A を目的とする採卵では新鮮胚生検が推奨される。